



シンガポールの学生を迎えて(細井副学長[右])

入り口にしていただければと思います。

グローバル化

「グローバル化」あるいは「グローバルイゼーション」(英語: Globalization, Globalisation)とは、社会的あるいは経済的な関連が、旧来の国家や地域などの境界を越えて地球規模に拡大し、様々な変化を引き起こす現象です。経済的には、国内市場と海外市場のボーダーがなくなり、労働力も海外から調達できるようになります。私たちの生活や若い方々の将来に大きく影響する変化です。高等教育もすでに市場化・グローバル化し、世界全体の留学生人口は増え続けています。この状況下で、大学で学ぶ学生のみなさんに求められていることは何でしょうか。

徳島大学のグローバル化

徳島大学はこのような状況下、以下のような方針で次世代を担う人材を育成し、また、大学自身のグローバル化を推進します
①外国語によるコミュニケーション能力を鍛える新しい教育プログラムを導入するとともに、一部授業を英語により実施します。
②英語で授業を行う外国人教員を増員し、より多くの外国人留学生

徳島大学のグローバル化と学生のみなさんに期待すること

副学長(国際担当)
国際センター長

細井 和雄 (ほそい かずお)



日本人学生も大活躍の国際交流イベント

を受入れます。

③奨学金制度を充実させ、学生の短期・中長期留学を推進します。

このような取組によつて、全学部学生が少なくともTOEIC 600点以上(TOEFLEBT:62-63点)以上の成績を修められるように英語力を養います。文化や言語の異なる人々に英語などの外国語で自分の意見を伝え、相手を理解するコミュニケーション能力の向上を目指します。

これまでの経験から

30年以上前になりますが私自身、米国メリーランド州のジョーンズ・ホプキンス大学へ、留学した経験があります。海外から日本はどのように見えるのかを知るとともに、各国から集まる研究者や学生と一緒に過ごすことで自分がこれまで行ってきた研究の進め方などの長所や短所を知ることができました。また、異なった環境で行う研究には大いに新鮮味があり意義深いものでした。休暇には米国

東部を旅行し、海外生活を楽しむことも出来ました。今でもいい思い出として記憶に残っています。
日本に帰国してからは徳島大学の教員として、海外の研究者と共同研究を行い、学内の外国人教員とプロジェクトを組み、留学生を指導してきました。確かに困難にぶつかることもありましたが、様々な価値観を取り入れて、それを乗り越えていくことにより、より良い結果を出して来られたと思います。

地域のグローバル化

常三島地区に建設中のグローバル・プラザ(仮称、グローバル・グロ・プラザ)は本学学生の学びの場であるとともに地域との交流にも開放されます。実生活から専門的な能力まで、種々の役に立つイベントを開催する予定です。
今回の徳大広報とくtalkの読者から、一人でも多くの方が海外に関心を持ち、異文化理解、異文化体験に第一歩を踏み出していただけだと願っています。
ドアは開かれ、みなさんを待っています。

碧眼で見た日本の学生の勉強の仕方



大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 教授

Wolfgang Herbert

(ウォルフガング・ヘルベルト)

出身国: オーストリア

専門分野: 比較文化研究・比較文化論

授業科目: 独語

来日のきっかけは、青年の時の空手道との出会いです。専門は比較文化研究で、それに関連する授

グローバルな人材の国内育成



大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 准教授

座喜 純 (ざきじゆん)

出身国: エジプト・アラブ共和国

専門分野: 国際政治・イスラム法

授業科目: 英語・イスラム思想

エジプトのカイロで生まれ育った「日本人」の私は、現在、国際政治におけるイスラーム思想の波

業を担当しています。欧州オーストリア人の目から見た日本の大学の在り方について、極論ではありますが述べさせてもらいます。
過食症とは、飽食の社会に起きる現象です。衝動的脅迫的に暴食して嘔吐を繰り返します。
最近ドイツの中・高等学校の教育制度に対し、辛辣な批判をする若い哲学者がいます。試験勉強を「過食症」に例えています。試験の為に「知識」を頭に詰め込み、試験でそれを吐き出して、流すからです。
世界中の小学生たちは、学校に行くことを楽しみにして目をキラ

及に関して研究をしています。

エジプトの大学を卒業後に初めて来日し、日本の大学院に入学するまで、大学は最高教育機関として専門分野の知識を習得し研究する場所であるという意識はあったものの、単なる学問の場であると私は認識していました。ところが日本の大学院で実際に学生生活を始め、日本の大学および大学院には他国に類を見ない日本固有の価値と役割が兼ね備えられていることに気づき、感心いたしました。
それは、日本の大学では、同級生同士、先輩と後輩、在学生とOB・OG、学生と教職員等、様々

な人間関係を通じて、学生たちは卒業までの期間、専攻の学問を追究するだけではなく、社会人となるための素地を養い、社会生活の基盤を確立していくという点で、専門分野の学問研究に集中する各国の大学機関とは、大学教育の果たす役割が大きく異なることでし



エジプト: カイト・ベイの要塞

た。つまり日本の大学、学び舎には、人間形成の場という大きな価値が備わっているということだと思います。

徳島大学では、上記のような人間関係を構築するだけではなく、世界各国からの留学生たちや外国人教員とのコミュニケーションを通じて、学生たちは国際的な価値観や海外文化を貴重な実体験として学んでいます。その結果、在学中に海外留学に行く学生のみならず、本学のカリキュラムのもとに学ぶ学生たちも、徳島で学びながら国際教育の環境が得られると

記憶に保存せずにおしまい。
本来勉強とは、世界観、視野を広げ、想像力を生かし、自分の頭の中の面白い新しい世界を創り、一生に渡って楽しめます。
日本の学生は勉強できることこの有難さを意識していないと感じます。自分はどれだけ恵まれているか気づいていないのです。
自分が望んでも十分な教育を受けることができない子供たちが、世界中にどれほどいるのか?
彼らは学校に行けるならば、眩しいほどに目をキラキラさせるに違いない。

今日、日本社会やいづれの企業も必要としているのは、国際的な多様性の共存を図れる、強靱かつしなやかな感性を備えた人材です。徳島大学という豊かな土壌のもとで育った学生たちの、更なるグローバルな活躍を心から期待しております。

徳島大学での日本の 医学教育との出会い



大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 特任講師
Kalubi Bukasa(カルビ・ブカサ)
出身国: コンゴ民主共和国
医学: 耳鼻咽喉科医学英語、栄養学英語(学部)
コミュニケーションノハウ、
英吾論文作成法(大学院)

私はコンゴ民主共和国の首都であるキンシャサから来ました。コンゴ民主共和国はサハラ砂漠以南



のアフリカの国の中で2番目に大きな国で、「アフリカの心臓」とも呼ばれています。

光陰矢の如し！この大学で教え始めてから既に8年が過ぎました。私の徳島での経験を振り返って、第一の良かった点は、異なる文化やシステムの中で働くことができる、異文化交流能力を上げ

歯学部における 国際化と英語教育



大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 助教
Omar Rodis (オマー・ロディス)
出身国: フィリピン
専門分野: 小児歯科、歯科英語
授業科目: 歯科英語(学部)、
アカデミックプレゼンテーション(大学院)

私はフィリピンのサウスウエストン大学を卒業後、セブ市保健局の公衆衛生歯科医として勤務

学生へのメッセージ



大学院ソシオテクノサイエンス研究部 准教授
Antonio Norio Nakagaito
(アントニオ・ノリオ・ナカガイト)
出身国: ブラジル連邦共和国
専門分野: 材料科学
授業科目: 工業英語、材料工学(学部)

日本の大学で外国教員として学生と接する時、私は学生にとって良い話ばかりでなく、良くな

外国人教員の ノートブック



大学院ソシオテクノサイエンス研究部 講師
Stephen Karungaru(ステファン・カルンガル)
出身国: ケニア共和国
専門分野: コンピュータビジョン・パターン認識
授業科目: 画像処理工学・情報計測工学(学部)
画像応用光学(大学院)

私はステファン・カルンガルと申します。平成10年にケニアから日本へ来ました。

ることができるとです。第二の良かった点は大学生を対象とした医学英語カリキュラムを新しく構築するのに寄与することができ、そして大学院の英語カリキュラムを改良することができたことです。これらのプログラムは日本医学英語教育学会の承認を受けており、いくつかの医学部が私たちの方法を採用しています。

貴方は医者になるために医学部に入ろうと決めた日から、大きな社会責任を負うこととなります。一般社会は医師を尊敬するとともに、小さな違法行為にも厳しい判定を下すことを心にとめておかな

語に関する全国共通のコアカリキュラムを実践しながら、歯学部学生と大学院生に英語教育をしています。IFRは国際的なコミュニケーション能力を開発する歯学部内での拠点になり、学生、留学生、教職員が絶えず、集まってくるようになりました。IFRでは学生達は主に英語で会話をしています。

歯科英語の授業の中では、学部学生が歯科医師役と患者役に別れての英語によるロールプレイを実施し、そのロールプレイにおいて彼らは楽しく演じ、授業後には学生から肯定的なフィードバックを

ルでは公立の大学のみ研究をします。ほとんどの私立大学は研究をせず、利益を得ることを優先した授業のみの教育システムしかありません。学生の皆さんは、日本の教育システムの良い点をもっと認識し、大いに利用して、そしてそのことを誇りに思いましょう。他国の多くの大学にはない立派な教育システムが日本の大学にはあるということに気付きましょう。

次に、日本の大学生について良くないと思うところについてです。良くない点は、授業において学生からのフィードバックムにアップします。その狙いは、学生が授業の内容を復習できるようにすることです。授業中はスライドだけでは足りないので、黒板も利用して説明します。さらにコンテンツの理解を深めるため、授業に加えて新たに演習も取り入れました。また、最近の大学のグローバル化を応援するために、英語での授業を始めました。なぜだか分からないですが、英語で授業し始めてから学生とふれあいが増えたと思います。

ければなりません。学生の時から既に、このことを理解し、未来の医師としての精神と心構えを發展させなさい。さらに、猛烈に勉強しないで良い仕事に就こうと期待することは練習なしでマラソンに勝つことを期待するのと同じです。貴方の勉強についての座右の銘は何ですか？私のモットーは、「日を数えるな、日々を有意義ものにせよ」です。意味は、毎日勉強してその日その日を勉強した価値のある1日にする必要がある、試験期間が近づいてきたときに知識を詰め込むだけの日々にするな、というものです。これは特に英語

受けました。大学院生に対しては、アカデミックプレゼンテーションコースを設定し、英語による論文執筆方法とプレゼンテーションスキルを教育しています。

歯学部のグローバル化への取り組みのために、歯学部学生は短期滞在留学プログラムにより、海外での歯学教育を体験することが可能です。交換プログラムでは海外の大学教員や学生を受け入れることも実施しています。私の目標は、歯学部のグローバル化を推進し、学生に世界に注目してもらい、世界中の人のコミュニケーションを行う機会を与えることです。

が完全に欠如していることです。授業において学生からの質問や意見がない場合、先生は、あなたの困っていることや疑問を解決することができず、どうしようか？ほとんどの外国人は、授業中に見て唾然とするだろうと思います。少なくとも、西洋諸国では考えられません。まじめに熱心に製品を作っていた一昔前の日本では、それでも技術で世界をリードし、大きな役割を果たしていました。しかし、時は変わり、グローバル化する世界では単純な知識以上にあなた自

壁に適合することは困難だと思えます。自分の意見が受け入れられないことはつらいと思います。現在は外国人教員のサポートシステムがないので、大学内で様々なやり取り(メールや会議や事務関係など)があっても、日本語で対応するしかないのは大変だと思います。

あなた自身に質問を続けてください。なぜ私は徳島大学にいるのですか。私はここで何を達成するのでしょうか。もちろん卒業後にはいい仕事に就きたいですよ。そうであれば、職場で満足するために必要な知識を身

を習得することに関して真実です。英語力は文化の違いを遣り繰りし、国際社会で成功を収める為の鍵となる技量の一つです。自分を信じ、そして貴方の努力をポジティブな方向に考えなさい。負の感情は失敗につながるからです。素晴らしい医学の専門家になって成功を収めることを期待しています。



オカピ。19世紀に発見され、コンゴ民主共和国にしか見つかっていない動物



身のアイデアが重要となつていきます。頭の中に単純な知識を蓄えることは、インターネットを通して世界中のデータベースに容易にアクセスすることができ現在では全く意味がありません。これからは斬新なアイデア、意見・批評・ソフトウェアと言った知的財産が求められる時代です。「出る杭は打たれる」という古いことわざを忘れるべきです。このことわざは、今では時代遅れだと思えます。礼儀作法を重んじ自分らしくありながら、もっと自分の考えを表現すべきです。

につけるチャンスは今です。教育は自由であり、教育は命です。教育は自信につながり、さらにその知識は他人をインスパイアする力となります。そして身につけた知識は職場を始め、世界も変えられます。あなたの能力と知識がこれから必要になるので、徳島大学で成長し、かつ知的に成熟してください。大学では何か試したり、間違えたり、やり直したりするチャンスがあるので、是非使ってください。それで「All work and no play makes Jack a dull boy」時間が許すかぎりいっぱい遊んでください。

対話のある授業、 自主性を育てる授業

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
分子薬理学分野(歯学系) 教授

吉本 勝彦 (よしもと かつひこ)



先生は本誌前号(156号)の「図書館特集」で蔵本図書館副館長として「授業サポートナビ」について語っておられます。これは図書館のあらゆる資料を、授業内容に即して利用できるように整備を進めているのですが、さらに学習管理システム(LMS)などを用いた教育支援についても検討を進めています。

「技術的なことを学んでもらうこともありますが、なぜこのようなことを行うのか、どうして必要なのかを、先生方に理解してもらうことが大切だと考えています」

そこでご自身の授業でも率先して、サーバーに置いた資料を使った予習を、学生に促すとともに、プリントして授業に持ってくるよ



「学生に自分で考える時間を持つ習慣をつけさせたいと思います。今のスタイルが良いのかどうか、いろいろと悩みながら取り組んでいます」

専門的な内容も、社会的に話題になっていることやニュースなどを取り入れて、わかりやすく興味を持てるように工夫していますが、学生をいかに飽きさせないように進めていくかは、すべての授業共通の悩みや課題であるようです。



私は中国の出身です。生まれは、北京、上海みたいな大都会ではなく、北の黒龍江省ハルビン市からさらに、北へ100km離れた綏化市という小さな田舎街で

す。規模は徳島市と似たような感じ。25年前、大学同級生の誘いで私費留学生として来日しました。所持金は十数万円しかなく、不安はいっぱいでしたが、それを



さらに学生がきちんと予習ができていないかを見るために、授業はミニテストから始まります。授業時間の約3分の2はこのテストとその解説を進められ、残りの時間は資料を使い、なるべく多くの学生と直接対話するように努めています。

わずか1時間程度の授業で、効率よく教え、学ぶ工夫としてネットを使うのは一見簡単な方法のようですが、それだけで学生の勉強が進むわけではありません。

先生は、少しでも学生と向き合うことに時間を割き、テストや資料の奥にあるものを読み取り、行間に様々なキーワードを書き込むことを教え、学生に授業の内容を強く印象づけることに重点を置いているのです。

「私が三国志を読んだ(と言って目を通す程度)のは日本に来てからです。その理由は、当時留学していた筑波大学の研究室の日本人学生はみな三国志ゲームの達人でした。ある日、三国志について、沢山の質問を投げかけてきました。ある意味でのカルチャーショックで、顔を赤くする余裕もなく、ただ頷いて聞き流すのが精一杯でした。彼らの表情から明らかに、「この人、何もわかっていないな」とも読み取れるにもかかわらず、日本語では説明できないみたいな仕事しかできない自分が情けなく、惨めさのあまり彼らを直視する勇氣すらありませんでした。その日に中国の友人に電話し、三国志を

いつか外国人に「源氏物語」、夏目漱石、芥川龍之介などについて質問され、また、いつか同僚が外国人、上司が外国人であることを想定しながら勉強に励んで頂きたいと思います。

海外留学の 心構え

国際センター教授
金成海 (きんせい かい)
出身国：中国
専門分野：数値解析
授業科目：学部：確率統計学
大学院：数学特論

超える根拠のない期待もありました。留学中にはいろいろと困難はあったものの、無事に学位を取得し、民間企業、研究所を経て、15年前から本学の国際センターで国際交流に関する仕事をするようになりました。主に、海外大学との連携、外国人留学生の受け入れ、および指導・相談などを担当しています。

本学には、13カ国からの外国出身教員30名程が在籍しており、これからさらに増える予測です。外国出身教員の存在は学生にとって、早い段階で異文化体験が出来る環境を与えることになり、学生のグローバル化意識の向上、さらに海外留学への関心を高めることに寄与できると考えられます。

また、専門分野以外の潜在的な力を発揮し、グローバル人材育成に積極的に取り組むことは、外国出身教員として果たすべき役割でもあります。

グローバル人材とは、英語或いは外国語ができる人、というイ

メージが強いですが、社会が求めているグローバル人材とは、世界の舞台で勝ち取る能力を持つ者と言われています。そのため、外国語は勿論のこと、日本の文化、風習、歴史などの知識を身につけ、更に、専門知識をしっかりと勉強する必要があります。

私が三国志を読んだ(と言って目を通す程度)のは日本に来てからです。その理由は、当時留学していた筑波大学の研究室の日本人学生はみな三国志ゲームの達人でした。ある日、三国志について、沢山の質問を投げかけてきました。ある意味でのカルチャーショックで、顔を赤くする余裕もなく、ただ頷いて聞き流すのが精一杯でした。彼らの表情から明らかに、「この人、何もわかっていないな」とも読み取れるにもかかわらず、日本語では説明できないみたいな仕事しかできない自分が情けなく、惨めさのあまり彼らを直視する勇氣すらありませんでした。その日に中国の友人に電話し、三国志を

郵送するように頼んだことは今でも鮮明に覚えています。今になって言えますが、一生忘れられない苦い思い出でした。

宇宙飛行士は宇宙から地球に戻ると、価値観が変わるとよく言われます。具体的に何がどう変わっただかは知らないですが、留学経験者としてなんとなく分かるような気がします。中では到底想像できないことでも、外からは容易に見えるようになると思います。その意味でも学生の皆さんに日本を離れ、違う角度から日本、そして自分をもう一度見直し、国、宗教、民族などを改めて理解した上で、多文化共存の時代に適応できる能力を身につけるためにも、海外留学を強く勧めたいです。